

# 知覚動考

寒河江市立南部小学校  
校長室通信  
校長 白田 敏幸

～「誰一人取り残さない 子供の可能性を引き出す学校づくり」～

## 卒業アルバム制作に関わる教師の負担 【TRILL NEWS より】 (要約)

### 1 表面化した教師の過重負担

学校生活の思い出を象徴する卒業アルバムは、多くの人にとって大切な宝物であるが、その制作プロセスの裏側には、教師による膨大な「無償の労働」が隠れている。SNS上の投稿をきっかけに注目を集めたこの問題は、写真の選定、レイアウトの確認、個人の登場回数の調整といった煩雑な実務が、通常業務の合間や時間外に行われている実態を浮き彫りにした。これらの作業には残業代が支払われないケースも珍しくなく、教師の大きな負担となっている。

### 2 社会的認識のギャップ

一般社会や保護者の間では、アルバム制作は「業者がすべて行っているもの」あるいは「印刷会社が自動的に仕上げるもの」という認識が根強い。今回の SNS での反響においても、「教師が関わっているとは知らなかった」「申し訳ない」といった驚きや恐縮の声が多数寄せられた。一方で、その大変さを知る人々からは、無償で過酷な作業をこなす教師への感謝と共に、負担軽減の必要性を訴える意見が上がっている。

### 3 アルバム制作における具体的・精神的苦痛

制作実務において特に負担が大きいとされるのは「写真選定」である。単により写真を選ぶだけでなく、児童一人一人が写っている回数を名簿でカウントし、不公平感が出ないように細心の注意を払う必要がある。さらに以下のリスクが教師に精神的なプレッシャーを与えている。

- ◇名前の間違いや取り違え：卒業後の修正が効かないため、極めて高い正確性が求められる。
- ◇保護者からのクレーム：写真の枚数や写り方に対する厳しい目が向けられる。
- ◇判別の困難さ：小学校6年間の成長に伴う容姿の変化を判別し、膨大なデータから抽出しなければならない。

これらの作業は、担任業務と並行して行うには限界に近い負荷となっている。

### 4 変化する制作のあり方

現状を打破するため、一部の学校では AI による写真選定の導入も始まっているが、最終的な確認には依然として「人の目」によるアナログな作業が不可欠である。

また、注目すべき動向として「保護者主体」への移行が挙げられる。保護者からのクレームを契機に、あるいは教師の負担軽減を目的として、保護者が制作を担うケースも出てきている。実際に体験した保護者からは、その作業の過酷さを再認識したという声も上がっている。

### 5 結論

卒業アルバム制作は、長年「教師の善意」というブラックボックスの中で維持されてきた。しかし、働き方改革が叫ばれる昨今、見えない部分での教師の役割が可視化されたことで、学校・家庭・業者の役割分担を見直すべき時期に来ているといえる。アルバム制作が単なる事務作業ではなく、多大な気配りと責任を伴う業務であることを社会全体で共有し、持続可能な思いづくりの形を模索することが求められている。